

毎年、三月下旬になると、葉ワサビの手入れと収穫のためにぼくは山に入る。砂防ダムを越え、川の源流に向かい、細い山道を進む。雪害で倒木や道がくずれているために、冷たい沢の中を歩いて進まなければならない所もある。ウラシマソウやトリカブトなどの野草が多く見られるようになると、山の神に支配されているようになりんとした空気が広がる。手がちぎれそうに冷たい沢にはサワガニが歩いている。大きな石を裏返すと、カワゲラやカゲロウなどのきれいな水にすむ生き物が見られる。魚は見られない。七十代後半の大おばによると、子どもの頃に一匹だけ魚えいを見たことがあるそうだ。斜面をすべりながらのぼり、葉ワサビの生育の状況を観察する。ワサビの根は浅く、茎も葉もやわらかいので、一株からほんの少しだけ茎をそっと折って収穫する。つぼみは辛くなるので、葉よりも優先して収穫する。茎はみずみずしく、沢の水を十分吸って生育していることが感じられる。折り取った茎の先端から目にし激を感じるような青くさいにおいがする。気温が上がると、ワサビの真っ白の花が沢中に広がり、とても幻想的だ。葉ワサビは、沢の水のめぐみを最も受けている植物だと思う。葉ワサビが生育しない山は、里山ではなくなってしまうのだと思う。

この沢から流れる水は、砂防ダムに注ぎ、今までは簡易水道の水源として使われていた。現在、ぼくの家の水は隣接する雲南市木次町にある尾原ダムから提供された水道水と別の沢の山水の両方を利用している。山水は主に野菜を洗うのに使っているが、雨の日にはにごった水になり、神社の上の沢の水かさが増え、流れる勢いがついていることが想像できる。水道水の水が、十分にろ過され、安全性を確かめた上で提供されていることがよくわかる。

水道水を提供する尾原ダムは、我が家から二十キロ、車で一時間の所にある。去年十一月に中国土木学会の斐伊川インフラツーリズムでこの尾原ダムや三成ダム、斐伊川分流せき、来原岩樋を見学した。保育園の時に見た尾原ダムは、大型ブルドーザーやダンプトラックが何台もいる巨大な茶色の穴ぼこだったが、今はその穴に豊かな水をたたえ周辺には木々がしげっていた。特別に入室させていただいた制御室には、ダム全体を見渡せる広い窓と何台ものモニターとパソコンがあり、気象状況と水位や水の流入・流出量などのデータが次々と表示されていた。ぼくは、ダムの豊かな自然にいやされると共に、自然に立ち向かう勇やかな人間の姿に心を動かされた。

この水は、宍道湖の湖底に配管し宍道湖の北の市町村にも送られている。遠くの広い地域まで水を送るには、たくさんの水と圧力が必要になる。ぼくは、奥出雲の自然の強大さを思い知らされた。尾原ダムには水を供給する働きと川の水の強大な力をコントロールし、水害から人間を守る働きもある。斐伊川は、天井川なので洪水が起きやすい。だから、大雨の時はダムでしっかり貯水し下流を守る。

斐伊川の力は、こうしたダムの力でもかなわないことがある。はんらんしそうな時には、斐伊川分流せきで神戸川に放水をする。そうすることで、宍道湖に流れる水を減らし、宍道湖周辺に住む地域の人間の命を守る。

ぼくは、見学を通じ、里山を守る活動をする時、地球の環境保護を考える時、人間の命を守る防災の視点をもつ必要があることに気づいた。ダムやせきを造ることは元の自然を変えることになるが、人間の命にはかえられない。どこまで豊かな水の力をかりなのか、どの部分からは人間の知恵で自然災害を防ぐのか。ぼくは豊かな水でうるおされた自然とふれあい、対話しながら、時に歴史上の水対策に力を注いだ先人たちに思いを寄せながら日本の水を守る方法を考え続けていきたい。